平成 17 年度奨励賞

NPO 法人日本医学図書館協会奨励賞の選考

順天堂大学図書館

青木 仕

平成 17 年度の日本医学図書館協会奨励賞は、岡田英孝氏（東京医科大学図書館）と諏訪部直子氏（杏林大学医学図書館）の 2 名に決定した。本賞は過去 5 年授賞者が無く、この年度の二人は久々の受賞者であるとともに、両名は日本医学図書館協会が NPO 法人化された最初の受賞者となった。

日本医学図書館協会奨励賞の歴史は古く、昭和 38 年の小沼医学図書館賞に端を発している。本賞は、当時のベリオディカ・ヤポニカ社の小沼一成氏から年間優秀論文に毎年 10 万円を贈りたいという申し出によって創設された賞である¹⁾。その後昭和 45 年より日本医学図書館協会賞・奨励賞と名を替え今日に至っている。今年度より日本医学図書館協会が法人化されたことに伴い協会の規程集が改訂されている。従来の本賞の授与取扱規程では、受賞候補者の選考を応募によって決定する方式が主に行われていた。今回より委員会が積極的に候補論文を選考し、受賞候補者を決定するように改訂された。今後も若い医学図書館員の励みにもなるとされる本賞の受賞者が継続的に生まれるように願うものである。受賞対象論文の掲載誌は、本協会の機関誌である医学図書館がやはりメインに選考対象になるものであり、若手医学図書館員には本誌への積極的な論文の投稿が望まれる。下記に両名の受賞対象論文とその推薦理由を簡単に記す。

岡田英孝

・電子ジャーナルにおける訂正記事の扱い．医学図書館 2005;52(2):138-44.

近年の情報メディアにおける電子ジャーナルの進展は目覚しく、なかでもそのリンク機能による文献間の相互参照は便利な機能である。本論文はこのような状況のなかで電子ジャーナルの訂正記事の取り扱いを調査している。電子ジャーナルの普及に伴い、本研究のテーマは新規性があり関心の高いテーマの分析である。研究テーマの着眼点としては、意義ある主題の選択である。調査対象誌は、PubMed 収載誌で自館所蔵の 114 タイトル 901 件であり、

調査対象期間は 2003 年出版の雑誌である。調査対象数としては充分のデータであると考える。調査の結果、被訂正論文では訂正記事へのリンクの有無に雑誌や出版社により相違が認められ、リンクの方法も幾つかのパターンが認められた。被訂正論文と訂正記事との相互の参照はいまだ十分にリンクが張られていないことが判明した。訂正記事に対する出版社ごとの取り組みの違いも認められた。

本論文は、自然科学の原著論文の形式で執筆されているが、結果の章に考察的内容の文章が混在しており整理が不十分であるところが散見される。にもかかわらず、本論文は電子ジャーナルの普及に伴い時宜を得た調査であり、奨励賞に値する論文である。

諏訪部直子

・「EBM」を書名に含む国内臨床医学書の分析と評価．医学図書館 2004;51(4):363-7.

・臨床医学論文執筆に必要な情報リテラシー．医学図書館 2005;52(1):53-8. の 2 論文に対しての受賞である。

今日の医学界では、EBM に関する資料が世界中で発行され EBM は医学界の大きな潮流になっている。受賞論文 1. 「EBM を書名に含む国内臨床医学書の分析と評価」では、調査対象期間 1997 年から 2004 年までの 7 年間に EBM を冠した図書の国内での出版動向を明らかにしたものである。図書は 169 件出版され、件数は年々増加傾向にあった。その内訳は医師向けの臨床医学書 40.2%，EBM の解説書 28.4%，翻訳書 24.9%，ガイドライン 11.8%，その他 11.2% であり、解説書が約 3 割を占めていた。分野別に出版点数を見てみると解説書が分類される公衆衛生、臨床医学分野が多くを占め、次に EBM が薬剤の効果の分析に適していることから薬理学や EBM に基づく院内感染防止に関する図書を含む病院医療施設分野、看護学などが多くを占めていた。次に EBM 臨床医学書と一般臨床医学書についてその引用文献のエビデンスのレベルを比較したところ、双方に顕著な違いは見出せなかった。本論文は図書館員の視点から EBM 関連図書を計量的に分析し簡潔にまとめている。

2 編目の論文、「臨床医学論文執筆に必要な情報リテラシー」は、1. 論文作成の情報リテラシー、2. 生物医学雑誌への統一投稿規程の動向、3. EBM の潮流、4. 論文

執筆の注意などについて解説している。本論文は原著論文ではないが論文執筆に際して有用な最新情報を参考文献に列挙しまとめている。これから論文を執筆する若手研究者には役立つ内容である。このような筆者の継続的な論文の生産は、奨励賞に値するものであると判断された。

参考文献

- 1) 事務局. JMLA NEWS:医学図書館関係優秀論文賞の設定. 医学図書館 1963;10(6):211

Manabu AOKI : 〒113-0033 東京都文京区本郷2-2-26.

Tel.03-3813-3111 Fax.03-3814-9300

aokim@med.juntendo.ac.jp

(2006年6月12日 受理)

表彰発表

奨励賞を受賞して

東京医科大学図書館

岡田 英孝

「狐につままれた」。受賞の知らせを聞いた時の実感である。家を出た子供が立派になって故郷に帰ってきたような戸惑いと現実感のなさは今もある。ともあれ以下は研究のきっかけなど論文には書きにくいことを書いていこうと思う。

訂正記事というと「てにをは」など字面を直すだけの詰まらないものだと思われがちだが、中身を読んでみると面白かった。図のレイアウトがずれているだけの差し替え論文。“Throughout of the article”の一文で論文全体50は下らない語句の読み替えを強要する訂正記事。平謝りの撤回論文から、著者が認めず雑誌側の裁定で撤回された論文。とにかく多種多様な内容で研究者達の生の息づかいがよく出ていた。「この面白さを知らせたい」。それが調査の動機である。

しかし内容分析ではまとまらない危険性があった。そこで数値化できそうな項目を中心に研究のレイアウトを考えていった。データは業務で培ったものが利用でき、

大方の結果も予想できた。先行研究がしっかりしているのも幸いだった。研究の成果は第1回情報プロフェッショナルシンポジウムで発表することにしたが、発表時間30分を過大に評価し、あれもこれもと詰込んで抄録¹⁾を出したのが後に祟った。発表のデモを行うと優に1時間を超える。削っても削ってもまだオーバー。あとどこ削る? ダイエットの大変さが実感できた。

そこで「医学図書館」への投稿に当たっては論点を電子ジャーナル1本に絞った。これで削った箇所も復活できる。というのは甘く、また盛ったり削ったりの日々であった。そして動機の不純さ故か最後まで考察には苦勞した。今でもあの考察で良かったのか考える。

最後に以下の方々に感謝したい。東京医科大学図書館の高野・遠藤・野坂・山本の各氏には、実に辛抱強く発表・投稿に当たって、沢山の助言・指導を頂いた。質の向上は方々のお陰であり、不備の責任は全て著者にある。分館のスタッフにはさらに仕事でもご迷惑をおかけしたと感謝の言葉もない。また投稿の機会と助言を頂いた順天堂大学図書館の城山氏、掲載に当たり、粘り強く担当してくださった神奈川歯科大学図書館の鈴木氏にもこの場を借りて感謝したい。心の支えである妻と子供たちにも。最後に調査のきっかけを与えてくれた「JBC」の“Additions and Corrections”に感謝を捧げたい。

表彰 岡田氏

参考文献

- 1) 岡田英孝. 東京医科大学図書館分館所蔵雑誌における訂正記事の調査・分析. 第1回情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集;2004年10月21-22日;東京. 科学技術振興機構, 情報科学技術協会;2004.29-32.

Hidetaka OKADA : 〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-7-1.

hokada@tokyo-med.ac.jp

(2006年6月15日 受理)

協会奨励賞受賞報告

杏林大学医学図書館
諏訪部直子

このたびは、NPO 法人医学図書館協会奨励賞をいただき、大変光栄に思っております。2005年は大小合わせて6つの原稿を書き、締め切りに追われながら過ぎていった1年でした。そのため自分が書いたものを振り返る余裕もなかったというのが実情です。このような形で実を結ぶとは思いませんでしたが、私なりに頑張ってきたことを見てくださる方がいて、認めていただけたことが何より嬉しいです。

受賞の対象となった「EBM を書名に含む国内臨床医学書の分析と評価」は、2004年に開催された第21回医学情報サービス研究大会（東京）で発表した内容をまとめたものです。日本の医療界では1990年代後半から「EBM」ということがさかんに言われるようになり、気づくと「EBMに基づく～」「EBMに基づいた～」という図書が多数出版されるようになりました。そのうちいくつかを手にとってみると、根拠として使った文献を挙げさえすればEBMなのだという思想のもとに書かれているのではないと思われるものがあり、果たしてEBMを銘打って出版されているこれらの図書は本当にEBMの手法に基づいて書かれたものなのだろうか？という疑問を持ったことが調査を始めるきっかけでした。

もうひとつの受賞対象「臨床医学論文執筆に必要な情報リテラシー」は、協会誌「医学図書館」の特集「情報リテラシー・サービス」のために寄稿したもので、研究論文というよりは独自の小調査を含めた総説的な論文となっております。この執筆にあたっては、自分自身のテ

マに関する知識が散漫で漠然としていたため、自ら学びつつ要点を整理してわかりやすく伝えることに労力が費やされました。

これまでに、あるテーマについて原稿や講演の形で発表する機会が何度ありましたが、そのたびに痛感することは、自分がいかに未熟で知らないことが多いかということです。そしてそのテーマについて自分なりに一生懸命調べてまとめる過程で学ぶことのほうが大きいのです。誰もが自ら書いたり話したりすることで成長していくものなのだと思います。医学図書館界の発展と、自分自身の成長のために多くの皆さんが能動的な発表による学びの場に参加することを願います。

表彰 諏訪部氏

Naoko SUWABE : 〒181-8611 東京都三鷹市新川6-20-2.
oidenao@lib.kyorin-u.ac.jp

(2006年7月19日 受理)